日臨技 超音波体験コーナーに参画！

編集を終えて

平成 20 年度も終了します。と、同時に、私の会報 JAMT の編集担当が終了しました。会員の皆様には、平成 18 年３月号より現在のスタイルに変更しお届けしてきました。組織の会報は組織の情報を共有する手段でもあり、世の中に対する武器の一つともなります。その時々の社会の動きが我々にとっては、政府与党、そして厚生労働省の動きがキーポイントとなります。そのため、会員の皆さんが“関係ないよ”と思うであろう記事も載せました。「会員のお金を使ってあんな記事は関係ない」「検査の情報を書くのがあたりまえ」というご意見もいただきました。投稿者からは「会報はお互いの意見を交わす場ではない」という意見も言われました。そうでしょうか？では、投稿された方の目的は何でしょうか。お互いの意見交換をして、情報を共有することが向上にも繋がるのではないでしょうか。意見交換は酒の場だけではないはずです･･･。

情報公開のない組織は、歴史がそうしてきたように崩壊の道を辿ります。現在の行政などの動きを見ると会報の記事は先取りが多く、中っている事柄もたくさんあり良かったのではないかと思っています。

検査情報の収集は、＜現役＞で検査を担当している技師としての責任でもありますが、検査業務の中だけでは分かりえない情報を提供するのが会報ではないでしょうか。その意味でも今までの情報が少しでもお役にたてば幸いです。今後は、リニュアールされた会報を見るのが楽しみです。

知床半島の夕陽

夕陽は赤いものです。その夕陽を見てくれる人が居なくなっても赤いのでしょうか。はたして、犬や鳥の眼には夕陽は赤く写るのでしょうか？人間だから赤く見えるのでしょうか？

朝日の好きな人もいます。朝日は時が過ぎ沈んでいきます。しかし、夕陽は一時の闇を人に与え、時とともに形を変え、色を変えて登ってきます。それを見るのも楽しみではないでしょうか。

一昨年、長野県の松代町＜真田の里＞で行われた“人間セミナー“の後に見た夕陽は、夕陽とは言い難い“輝き”を持っていました。たとえ、レンズのいたずらとはいえ、雲間から流れる“一条の光”も格別なものを持っていました。人はいつもこのような輝きを持っていたいものです。

最後になりますが、会報に投稿していただいた多くの皆様と、周囲を気にせず快く執筆に協力していただいた皆様、そして図書発刊企画委員会の皆様に感謝いたします。そのような皆さんがいなければ会報は出来なかったでしょう。感謝しております。本当にありがとうございました。

【高田鉄也】

灰色の落日

ねぇ夕陽は何故赤いの
頬を染めてお前は云う
神様が僕らにくれた色
胸が高鳴る僕が答える
私が居なくても赤いの
潤んだ瞳のお前が囁く
僕が居なくても赤いの
言葉にならない僕の声
色褪せた灰色の夕陽が
お前と僕をつつむ黄昏

３月の花：A-ｲ-1、B-ﾆ-4、C-ﾛ-2、D-ﾎ-5、E-ﾍ-6、F-ﾊ-3

アラン『四季をめぐる 51 のプロポ』

終えることによって始めない人は、始めることができない。
哲学には「石」のような哲学もあれば、「幸福」な哲学もある。
何が問題なのかが完全にわかったら、その問題は解決されている。
したがって解決とは問いの真に明晰な把握にほかならない。
大とは小の合計にすぎない。
謙遜のなかには、まだあまりに多くの野心があると、ぼくは思う。
第一の点は、自分に求めている徳を、他者に要求しないことである。
それがはたしてよかったのか悪かったのかは、人の知りえないことである。
坂を転がる石はどんな石も、他の石を転がしてしまう。
いつも存在するものに満足しなければならない。
それがよろこびだったら、もっといい。

［四季をめぐる 51 のプロポ］より

ALAIN＜Emile Auguste Chartier＞

ノルマンディーに生まれ、哲学者Ｊ．ラニョーの講義を通して、スピノザ、プラトン、デカルト、カント、ヘーゲル等を学ぶ。エコール・ノルマル卒業後、65 歳まで教育に携る。＜1868-1951＞「ラ・デペーシュ・ド・ルーアン」紙に「日曜日のプロポ」を書きはじめたのが、彼のプロポ（語録）形式の初め。